

正月

時の流れの中に正月が毎年やって来るのは浮世で定めた約束ごと。いまでこそ正月はお目出とうの一本槍だが、もともと正月は盆と対となって先祖の霊を迎える年中行事の日であった。正月の門松は松を門に飾って、盆には松明（たいまつ）の迎え火で門を照らす。正月は年越し蕎麦で盆は素麺となる。対を裏付けるように、八月十五雲月を遮れば、正月十五雪灯を打つ」といって八月十五日が曇りなら一月十五日は雪となるという諺が中国には残っているそうだ。日本でもしばしば俎上に上がる冷夏と暖冬の対の関係も、遠くペル沖から熱帯にかけて起こるエルニーニョ現象を通してゆるやかに対の関係となっている。夏と冬、盆と正月の対を重ねて興味が尽きない。その記録的な凶作をもたらした冷夏のことの暖冬予想で一九九四年の正月元旦を迎えたが、今年一年どのように推移するのだろうか。最近二〇年ほどの一月の傾向を調べてみたが、やはり五六豪雪で有名な二〇〇二年の寒冬の頃を境に、最近では暖冬が圧倒的に多い。正月三が日の天気を見ても穏やかな元旦とか南岸低気圧による雨だとか「首都圏に下力雪」など暖冬特有の天気が多く目につく。

初日の出

大晦日も一夜明ければ正月となる。元日のことは森羅万象ごとく初がつく。初詣で始まり「初日の出」には新年の始まりとして新鮮な思いで出かけた人も多く、出会いも新

鮮で強烈となる。三島由紀夫の小説「平後の曳航」のなかに登場する主人公達が横浜の港の見える公園で、薄墨色の東の空に紅い満月が浮いたような初日を眺めプロポーズをするシーンがある。横浜での初日の出は午前6時50分、早朝の冷え込みで気温は恐らく2度前後の寒さだろう。

初日の出の時刻は南に行くほど、東に行くほど早く、小笠原では六時二十分頃、秋田新潟・潮岬の線で午前七時ちようど、最も遅いのが九州の対馬から五島列島にかけて約二時間遅れとなる。実はさらに早いところがある。東京から南東におよそ千キロの所にある日本領のマカス島である。自衛隊の基地と気象庁の観測所がある島で小笠原よりさらに一時間以上早い初日の出となる。

では世界で一番早い初日の出はどこだろう。元旦が最も早く来る東経一八〇度の日付変更線上で、日の出が午前零時に近い所を探して、夏の季節の南半球まで行かねばならない。冬至から一週間、南極大陸ではこの時期、太陽が沈まない常昼の世界となっていて日の出はない。南緯六七度付近の南極圏ギリギリあたりが目指す所になる。この緯度での太陽は低い高度で頭の上を周り、南の水平線へ転がるように巡り日が沈む。つかの間の日没のあと再び水平線を転がるように、ゆったりとした白夜での日の出となる。この付近は海の上なので残念なことに船の上でしか見えず、都会としてはニュージーランドのウェリントンあたりが最も早い初日の出となろう。

いずれにしても日の出の時刻は最低気温の時刻に近い。北海道ではマイナス十数度と寒く、東京や大阪では二、三℃の覚悟をしなればならない。漆黒の空が薄墨色の変わり、青白い薄明となり次第に茜色を帯び、ついには日の出の太陽がレザ―光線のごとく空を切り裂く燭光となって神々しい世界に引き込む。日の出の太陽は幽玄の世界を演出してくれるとともに、興味の尽きない姿をまかい間見せてくれる。

四角い太陽

白鳥の飛来地で有名な北海道の根室海峡に面した尾岱沼付近では、厳しい冷え込みの朝、日の出の太陽が四角形からワイニングラスときには六角形へと変幻自在に様々な姿を現すという不思議な現象がある。原因は二つ考えられている。海面近くの空気が上空より極端に冷たく、密度の違いから度の強い眼鏡のような薄い空気レンズが造られ、水平線に顔を出しかけた太陽をぐーと伸ばして四角形に変形する。撮影された写真をよく見ると四角い太陽は上面がまるくなっていることで裏図かられる。

下半分だけの半円の太陽に取っ手がついて水平線が輝く「栗のワイニングラス」型は、すぐ上空の強い逆転層で光が屈折され、円の半分が隠される時にできる沈下蜃気楼と呼ばれている現象でできる。また六角形の太陽はマイナス二十℃以下という低温の空気中で六角形をした極微の水柱の結晶が無数に浮遊している時に、光の屈折で出来ると言われている。

カナダや北極などの探検隊から見たとのいくつかの報告もある。流氷の浮かぶ凍てつく国境の海を前景に不思議な姿が現れるのも因縁めいた話である。

（気象大学校 村松照男）

季ごころ」

雑誌「気象」11年間にわたり気象エッセイを「かいたものです。少々、詳し過ぎるところもあります。」